

はじめに

六十歳の時、母は認知症と診断されました。それから八十四歳で亡くなるまで二十四年間、私は母に寄り添ってきました。しかたなく始めた母の介護でした。初めの頃は、母の下の世話や涎よだれの臭いがいやでいやでたまりませんでした。母をほったらかしにしてどこかへ逃げようと思ったこともありましたが。どうにかこうにか乗り切った二十四年間でした。

しかし、今振り返ってみると、この体験が人生にとって何と多くの大切なことに気づかせてくれたか。母の介護をする中で、私は人生にとって根源的なことを深く考えるようになりました。「生きるとは何か?」「死とは?」「命とは?」これはまさに認知症で言葉をなくした母から私への問いかけでした。

そして、それら一つ一つの問いの私なりの答えが、この詩集の中の言葉であり、詩であるように思うのです。この詩集の中にあなたの心に響き、あなたを優しく支える言葉が一つでもあって、その言葉がポストカードで大切な人に届くことを心から願っています。

分からなくても

できなくても

心は豊かに

この世界を感じている

認知症の母は何も分からないし、何もできないかもしれない。しかし、鈍いどころか言葉や動きがない分、母の心はとても研ぎ澄まされているのではないかと思うのだ。言葉に振り回され、忙しさにかまけている私よりよっぽど、母の心の世界は豊かに広がっていて、この世界を深く感じている。

この世界を感じている

心は豊かに

できなくても

分からなくても

こちら側と
あちら側が
あるうちは
そこには同情しか
生まれない

こちら側と
あちら側が
あるうちは
そこには同情しか
生まれない

正常だと思っている「こちら側」から認知症の母を「あちら側」と言って、奇行だ奇行だと馬鹿にすることもできよう、端から見れば母は可哀^{かあいそう}想に見えるかもしれない。でも、自分の頭の中に広がっている世界に沿って生きているという点では、母と「こちら側」の私たちとは何ら変わりはないのである。私には母が病気になる前よりも幸せそうに見えるときがある。



Date

Dear

Memo

post card



母からの手紙

母に会えない週末には
認知症の母へ手紙を書いた
お元気ですかで始まり
寂しくないかと付け加え
元気でねと母へ手紙を書いた
言葉のない母はその手紙を
口にくわえてしゃぶると聞いた
手紙は読むものと思っていたが
そんな味わい方もあるのだと
いつもよだれを流しながら
私を見つめる母を見て思う
母は私を感じている
やっと時間ができて
熊本の老人ホームに母を訪ね

その手紙を母に読んであげる
これじゃ手紙の意味がないじゃないか
言葉のない老人と
ろくでもない者が向き合って
その足りない部分を
埋めあって生きている
一人の静かな夜
母からの手紙が届く
文字のない無言の
紙も字もない手紙が届く
いつものようにお元気ですかも
寂しくないかの付け加えもなく
元気でねとどこにも書いてない
母からの手紙が届く
「その自分を生き抜け」と
私の心の中に届く
私の心に響く

